

コートディヴォール最高裁長官

クイ・ママドゥ氏の家系

真島一郎

1994年11月 グアカトゥオ村

アビジャンから夜行バスに揺られ、リベリア国境の街ダナネに着く。市街から40キロほど南にあるダン族の村、グアカトゥオを訪れるのは、これが3度めである。1980年代の末、私はこの村に2年間くらしていた。93年には日程をやりくりして半日だけ村に立ち寄っている。1年半ぶりにグアカトゥオを訪れる私を待っていたのは、精霊ガオがこの6月に村に現れたという知らせだった。グアカトゥオと近隣の8カ村、総人口6000人強の地縁単位をまとめる男子結社にとり、ガオは各村落で保管されている合計数十体の仮面の頂点に立つ、最高位の仮面である。それが今年登場したとなれば、先の結社長の“太陽が厳しくなった”1977年以来——結社長は不死の存在であるから“死んだ”とは語られない——ガオは実に17年間の沈黙をやり、村人の前に異形を現したことになる。しかも村の6月といえば、農繁期のさなかである。わけを聞くと、ガオは、クイ・ママドゥという人物に灌水をほどこしにやって来たのだという。2頭のウシが犠牲に供されたというその日の興奮ぶりは、よく見れば、円形小屋の白壁に黒土でつづられた“ようこそクイ・ママドゥさん”のフランス語に、いまだかすかな名残りをとどめている。このクイという名に、私はなにか聞きおぼえのあるような気がしていた。

父クイギオ

ダナネ地方にフランス人探査団が初めて送りこまれたのは1899年、象牙海岸植民地の創設令が發布されてから6年後のことである。その後、住民からの銃の徴収や反乱の鎮圧をへて降伏書の作成にいたる一連の“ダナネ平定作戦”は、1915年までにほぼ完了した。植民地経営の基盤となる行政単位カントンcantonの区分と、現地首長シェフ・ド・カントンChef de Cantonの任命も、この時期に並行して行われた。国立公文書館で当時の記録にあたると、グアカトゥオをふくむ9カ村については1906年7月に降伏書が作成され、カントン“ヨロレ”の命名がされている。いわゆるフランス式間接統治の幕あけである。1910年代後半のヴァン・ヴォレンオヴァン総督の行政通達にあるように、仏領西アフリカの原住民政策にとり、当初、現地首長は白人行政官の単なる助手、道具にすぎない存在とされていた。しかし両大戦間期に世界恐慌のあおりを受けると、フランスも植民地経営の合理化をねらった首長の復権策へと転じていく。象牙海岸では、首長制に職階と俸給を導入するレスト法令が34年に発布され、ダナネ地区の行政区分もこの年、大幅に再編成された。グアカトゥオの属する“ヨロレ”は近隣の2カントンとともに、新設カントン“クーランレ”に統合された。それまで三つのカントンに分かれていた総面積700平方

キロの土地の首長に任命されたのは、弱冠30歳のクイギオという人物だった。

クイギオの一族は、植民地化以前の地域紛争で、敵の攻撃から土地を守る戦士を輩出した父系リニージである。フランスの間接統治がはじまると、やはり戦士だった彼の父キアンは、紛争の仲裁能力を買われて1915年に首長に任命された。戦士リニージの少年クイギオも、以後は白人の下で働く行政首長の子息として成長した。父キアンは34年のカントン統合で首長職を解かれた3名のうちの1人であるから、彼は父の首長位を若くして継承し、隣接の2カントンも自らの管轄に加えたことになる。

青年時代のクイギオは、ダナネ駐在のフランス人行政官のお抱え狩人だった。白人社会との頻繁な接触を通じ、彼はフランス語の会話とごく初歩的な筆記を身につけていった。首長制の官僚化をめざした34年のレスト法令では、フランス語を多少とも解する人物を首長とする方針が盛りこまれていたので、彼が長兄をさしおいて新設カントンの首長に選ばれた背景に、この青年期の経験が深く関わっていたことになる。首長となった彼は、ダナネ司令部と地理的に連絡のとりにくい出身村クロジアレを離れ、強制労働でできあがった街道沿いにブトゥオ村を建設した。彼はそこにマンデ商人を呼び入れ、週一回の村市場も開設する。当時のダン社会南部ではきわめてまれなことだが、彼は30年代末ごろ、村に流れ着いたフルベ系の一導師のすすめでイスラームに入信し、本場のイスラーム教育をほどこすべく長子をモーリタニアまで送っている。44年にも男子をさずかると、彼はダン族の伝統的な名の代わりに、その子をムハンマドにあやかりママドゥと命名した。この男子こそ、50年後のグアカトゥオで大仮面の灌水を受けることになる人物クイ・ママドゥであった。脱植民地化の荒波は、この時もう目前まで迫っていた。

■ 罷 免

ウフェ＝ボワニがアフリカ民主連合（RDA）を結成する前後から、脱植民地化の動きは選挙キャンペーンのかたちをとり、ダナネにも到来した。1945、46年のフランス制憲議会の代議員選に際し、ダナネの現地首長6名は、フランス人行政官からウフェ＝ボワニの対立候補を支持するよう誘われていた。第1回選挙ではあえてウフェ＝ボワニを支持した彼らも、その後は植民地権力と親しい進歩党（PPCI）の支持に回り、51年のフランス国民議会選でもフランス側の推すセクー・サノゴを支持しつつづけた。30年以上におよぶ間接統治を通じ、現地首長は人頭税の徴収者、強制労働や徴兵の手配師として、ダン社会にかつてない権限を保証されていた。しかも首長位はすでに2世代めの息子らが継承しており、植民地の権益にあずかる一種の家系が形成されつつあった。そのため、植民地の解放をとнаえて村民の支持を集めていたRDAの宣伝活動を、50年代前半の彼らは徹底的に妨害し、RDA支持にまわった村長には法外な人頭税を課すようになる。一方のRDA運動員も首長の側近の畑を焼きはらい、首長在住村の市場を閉鎖する手段にうったえるなど、両者の緊張はしだいに増していく。55年12月、年明けのフランス国民議会選を前に、RDAの代議員候補ウェザン・クリバリがダナネを遊説したのち、この緊張は頂点に達した。首長側が選挙人名簿を不当に操作していた事実が発覚し、1月12日の投票日には2件の殺人事件が発生する。開票後にRDAの勝利が判明するや、RDA運動員による首長陣営への報復行為がはじまる。一般村民も報復に乗じたため、絶望した首長の一人はこの時点で司令部に辞表を提出した。57年、ダナネ行政官が“当地の首長制は完全に崩壊した”とする文書をアビジャンに送ると、ウェザン・クリバリは再度ダナネを訪れ、過激な報復に走った

RDA運動員2名を解任した。そして翌58年1月6日、RDA結成以来のメンバーとして総督府評議会の内務相に就任していたジャン＝パティスト・モケイは、ダナネ地区の首長を全員罷免するという異例の決定を下したのである。新たな首長は“民主主義の原理”に基づき、住民投票で選ばれることとなった。

クイギオは1934年の任官以来、首長業務を堅実にこなし、当初は5級だった職階も41年には4級、44年に3級、47年に2級、51年に1級と順調に上げていた。イスラーム入信後の彼は村民への粗暴なふるまいもひかえるようになったというが、50年代の激動期に反RDAの立場を貫いた点では、彼も他の首長と同じだった。58年時点で特2級まで昇格していた首長職を罷免されると、彼は自分の秘書を候補に立てて首長選にのぞむが、これまで税徴収に苦しんできた住民の前で、彼の陣営が勝利するはずもなかった。他のカントンと同じく、彼のカントンで首長に当選したのもRDAのダナネ運動員ドウォ・プロスペールだった。だがドウォは独立直後の62年、近親の者によって村近くのコーヒー園におびき出され、暗殺されてしまう。事件の真相は不明であり、ドウォが殺害者の妻と過去に通じていたための私的な怨恨とみる者もいたが、住民の多くは、4年前に首長を罷免されたクイギオがドウォの身内をそそのかして彼に復讐したという臆測にかたむいた。クイギオはまともな審議も受けずに、殺人罪で3年の獄中生活を余儀なくされた。

父親が政争の渦に飲まれようとしていた間も、子息ママドゥはダナネ町の小学校からダロア市のカトリック系コレージュ、ブアケ市のリセ・クラシックへと進み、首長の子弟ならではの学歴を積んでいた。父がようやく出獄したはずの65年、ママドゥは創設まもないアビジャン大学法学部に合

格している。

息子のやりかた

独立後の体制は、1958年のダナネ首長選で勝った者も負けた者も、まとめて時流の外に押し流していった。以前のダナネ地区はダナネ県となり、フランス人行政官の代わりに、中央政府が任命したアビジャン出身の行政エリートが知事に着任した。また、独立後は共和国の単独政党となったコートディヴォワール民主党＝アフリカ民主連合(PDCI-RDA)が国内各地に党の地方支部を組織したため、これまでは首長のつとめだった中央行政と地元住民の仲介役も、以後はPDCI地方支部長の任務となっていく。逆にダナネ出身で高学歴を身につけ、中央政界入りをうかがう者たちは、地元選出の国会議員の椅子を争うようになる。独立直前に首長全員が罷免されたのは象牙海岸でもダナネ地区だけだったので、6人の元首長たちがただの村人にもどるのもそれだけ速やかだった。しかし、罷免後の選挙でRDA運動員らが手にした首長の地位も、その後は国から毎月俸給を得るだけの一代限りの名誉職として、地方行政の粋からまったくはずされた過去の遺物となっていた。地方のトップに立つためには、今や新しい方法が必要であった。

首長の息子ママドゥが選んだ道は、法曹界だった。アビジャン大学法学部を1969年に卒業した彼は、司法修習期の2年をパリですごし、71年に帰国すると共和国検事代理をふりだしに、アビジャン、ブアケ、カティオラ、アバングルの各地裁で司法職を歴任、78年からはアビジャン労務裁判所長、アビジャン一審裁判所副所長、アビジャン控訴院判事、同控訴院部長の要職を次々と占めていった。彼はこうした経歴をふまえ、90年秋、ついに故郷ダナネの国会議員選に打って出たのである。

一方、かつてクイギオが首長だったカントンの大半は1964年以降、ダナネ県ズアン＝ウニアン郡の管轄となっていた。罷免された元首長たちがこの時点で新たにねらったのは、地方政治で権限を握るPDCIズアン＝ウニアン支部長のポストだった。実際の支部長選では、かつて職権を濫用した元首長や側近が落選を続けるなか、クイギオの陣営だけは勝利を手にする。支部長にはフランス語の能力が要求されたので、クイギオは58年の首長選で落選した元秘書クエミ・パスカルを再び擁立した。クエミは第二次大戦で対独国境要塞のマジノ線に投入された退役軍人であり、フランス語の能力は十分なうえ住民の信望もあつく、67年の第2回支部長選では初当選を果たしている。クイギオ本人はかつて首長を罷免され、殺人容疑で投獄された暗い過去さえ持ちながら、90年代前半まで大半の地方支部長選で勝ち続けたのは、その側近クエミだった。

1985年、子息ママドゥがアビジャン法曹界の出世階段をかけのぼっていたころ、父クイギオは推定年齢81歳、最長老の身で故郷に没した。晩年の彼は、クエミとともに80年の国会議員選候補者を背後から支え、その政界入りを実現させている。90年秋、父の失われた故郷で同じく国会議員選に出馬する息子は、いつしかママドゥでなく、自らをクイ・ママドゥと名づけていた。

空席

1990年4月30日、コートディヴォワール共和国はPDCIの単党制から複数政党制への移行を決定した。ママドゥが出馬したその年の秋の選挙は、政党間で議席が争われる共和国史上初の国政選挙となった。定数1をめぐるズアン＝ウニアン郡の選挙戦は、PDCI候補ママドゥの圧勝に終わる。彼は80年から党地方支部のメンバーとして道路整備事

業予算の地元誘導に成功していたし、アビジャン控訴院部長という当時の彼のポストも、候補者のなかでは破格のキャリアだった。晴れて国会入りしたママドゥは、新人議員の身で早くも国会付設委員会の長に選ばれている。

1993年12月7日、国父ウフェ＝ボワニの死去。同15日、後継者コナン・ベディエの第一次内閣発足。94年1月11日、CFAフランの平価50%切り下げ決定。共和国の基礎が大きく揺らいだこの時期、ママドゥの人生にもかつてない転機が訪れた。ベディエ新大統領は同月25日、前任者ラゼニ・クリバリの汚職辞任から1年近く空席のままだった最高裁長官のポストに、彼を指名したのである。大統領の任期中の死とそれに伴う後継手続きの法的な認定は、共和国憲法により最高裁長官の職権とされているが、ウフェ死去の時点でこのポストが空席だったため、やむなく副長官アペレテ・クレビィが代行認定者となっていた。こうしたいわくつきのポストをめぐり、人選の段階では複数の人名が飛び交った。最有力候補とされた副長官クレビィのほか、最高裁判事ケイ・ボギナールの名もあがったすえ、意外にも法曹界から3年前に退いたはずの現職議員ママドゥが指名されたのである。彼は法的中立の見地から任期中の議員職をただちに辞し、PDCIの一切の党務からも離れる旨を発表した。だが空席のビッグポストをめぐるこの就任劇の背景には、与党PDCIにとって90年以後のダナネ県が帯びはじめた政治的意義、また95年の次回総選挙でダナネが担うべき役割についての、ある種の思惑がはたらいていたと言わざるをえない。

西の息子たち

1990年5月。あと数日でグアカトゥオ村を後にする私に、友人の一人が問いかけてきた。こんどの選挙で、われわれダンはどの党に投票すること

になったんだ？ 私は無責任に答えた。あなたがたと同じ西の人間なら、ベテ族のFPIじゃないかな。彼は言った。でもそれはベテの党だろ？

1994年11月。ダナネの市場を散歩していると、かつてグアカトゥオ村小学校の校長だったウォイ・シャルル氏に出くわした。再会の抱擁を交わした後で彼の新居に通されると、居間にはFPI党首ロラン・バボの写真が額入りで飾ってある。あれから自分はFPIダナネ支部の幹部になり、街道沿いのこのりっぱな住まいも党から斡旋されたのだという。総選挙を翌年にひかえ、彼は党勢拡大キャンペーンで村々を奔走するさなかだった。

コートディヴォワールは、言語系統だけでも五つのグループが共存する多部族国家である。このうち国土の南半分を占める森林部について“東と西”の差をことさら強調する社会表象が、植民地期以来、今日にいたるまで一般にみとめられる。国土中央を流れるバンダマ川より“東”のアカン系社会は首長制とよべる政治組織を有していたのに対し“西”は無頭型のリニージ社会が占めていたため、西の住民が東に比べて野蛮で未発達だとする植民地表象がフランス間接統治期にまず発生した。独立後の共和国体制下でも、PDCIの党首ウフェ＝ボワニがアカン系バウレ族の出身であるなど、部族主義の根絶を標榜したPDCIではあれ、“西”は“東”に比べて国家権力の配分でも、社会資本の導入でも、劣勢に置かれがちだった点是否定できない。“西と東”の差と対立をめぐる表象は、独立後の史的経緯において、かえって助長されてしまったとすらいえる。

1990年に多党制が導入されると、かねてより“西”の有力部族と目されていたベテの知識人層は、ロラン・バボを党首としてイヴォワール人民戦線(FPI)を旗揚げした。同年秋の総選挙では20以上の政党が乱立するなか、事実上はこのFPIとPDCIの一騎

打ちとなる。結果はPDCIの完勝に終わったものの、国内南西部、つまり“西”のほとんどの県で国議選のPDCI得票率が70%を下回るという、かつてない状況も出来た。これはベテを中心とするクルー系諸部族とダン族の一定層がFPI支持で多少とも連帯した結果といえるが、そのなかでダナネ県は80%のPDCI高得票率をマークしていた。ダン居住域におけるFPIの拠点は地方都市マンに置かれていたため、FPIのキャンペーンも国境部のダナネまでは十分に浸透しきれていない憾みがあった。ただ、与党PDCIにとり、この時ダナネは、今後“西”の連帯に亀裂を生んでいくための橋頭堡と映じていた可能性がある。

総選挙前の1989年10月に発足したウフェ＝ボワニ第17次内閣では、ダナネに親族のいる人物としてすでに情報相オーギュスト・ミロモンが入閣している。95年総選挙をひかえて大統領を継承したベディエは、ダナネ出身者をめぐる注目すべき人事決定を、さらに閣僚以外にも広げた。93年12月の組閣で国民教育相となったダナネ出身の歴史学者ピエール・キプレは、ベテの父とダンの母をもつことで知られており、とくに彼の母方祖父は植民地期ダナネの現地首長であった。94年1月、ベディエはズアン＝ウニアン郡出身のママドゥを最高裁長官に指名すると、3月には同郡出身のゼランス・テレーズを共和国史上初の女性県知事に任命する。彼女の任官地も大統領の故郷ダウクロ県という演出ぶりで、PDCI系の日刊紙フラテルニテ・マタンは、いずれの抜擢も一面トップの大見出しで報じた。

PDCIは、この直後から大規模な西部キャンペーンに乗り出した。ダナネでは4月にベディエ支持の祭典が催され、それまでFPI支持を表明していた村の代表者がこぞってPDCIへの復党を願い出る一幕も報じられる。同じ祭典は5月、FPI党大会直後



ダナネ巡回中のクイ・ママドゥ最高裁長官
(『フラテルニテ・マタン』紙, 1994年5月25日)

西の息子たち: ウフェ=ボワニの訃報に接し、
首都ヤムスクロを訪れるダナネ吊問団
(『フラテルニテ・マタン』紙, 1994年1月15~16日)

のマン市でも催されている。これら一連のキャンペーンは、同月20日、ダン出身者として初めて三権の長の座を射止めたクイ・ママドゥのお国入りにより、当初の計画どおりクライマックスに達した。4日間におよぶ彼の帰郷には、国会議長ボザ・ドンワイエをはじめPDCIの要人が多数同行し、故郷ズアン=ウニアンのほか、マン市、ダナネ市、バン=ウイエ市の訪問も日程に入れた、ダン社会全体へのアピールとなった。党がこの訪問に何を期待していたかは、当時の『フラテルニテ・マタン』紙の論調から十分にうかがい知ることができよう。ベディエ大統領から最高裁長官のポストを賜ったクイ・ママドゥ氏は“ダン族の誇り”であり、今や“ダン族筆頭の指導者”となった。氏は“西の後進性との闘い”に立ち上がり“イヴォワール人、とりわけ西の息子たちの平和と団結”を説いていくのだ……。

この場合の団結とは、むしろPDCI支持に向けての団結であり、一行の巡回風景をおさめた報道写真には、ママドゥを出迎える“西の息子たち”ダンの伝統衣装があふれている。また“西の息子”がダン族にかぎらないことを示すために、クルー

系ウェ族出身の内務相コンスタン・ボンベも“西の息子”の一員として、このときママドゥに同行している。教育、衛生、環境整備、農業振興など、ダナネ県に対するさまざまな社会資本の投入を報ずる記事が『フラテルニテ・マタン』の紙面をにぎわせたのも、ちょうどこの時期のことである。

総じて体制礼賛をレパートリーの一つとするこの国の芸能人にも、“西の息子”はいる。ズアン=ウニアン郡出身の歌手ゴンソン・ピエロが、ヒット曲「フラテルニテ・マタン」で同紙の編集長だった入閣以前の同郷人ミロモンをたたえたように、ダブレ・ストーンはウフェ=ボワニの功績を「独立」で歌い、彼が死去するや、追悼アルバム「さらば」をリリースしている。ダブレはクイギオの村ブトゥオに生まれ、ママドゥ新長官の姻戚筋にあたる“西の息子”の一人であった。

■ハンモックと仮面

巡回なかばに故郷ズアン=ウニアンを訪れるママドゥは、4年前に彼を国会に送りこんだ地元民から熱烈な歓迎を受けた。ただ、この日の熱狂ぶりを報ずる新聞記事には、わずか数行ではあれ、

ある見過ごしがたいハプニングの様相が記されている。祖父の代から彼の家系を知る人々は、父クイギオの生前の姿にならい、彼をフランス植民地式のハンモックに乗せて凱旋させようと思いつた。だがママドゥはこの発案に謝意を表しつつも、それを丁重に断わったという。時代は過ぎ去ったとはいえ、独立前に罷免事件が起きたダナネにあって、現地首長の家系を喻に引く演出は、彼が選べるべき意匠ではなかった。植民地期に反RDAを貫いた父と、独立後にPDCIのエリートとなる息子。ダナネのトップであるための父子の違いはそのまま時代の違いであり、むしろその違いこそ、90年代の多党制を生きる“西の息子”にPDCIが要求した意匠だったのである。

クイ・ママドゥがハンモックに代えて自ら選り取った意匠こそ、グアカトゥオ村における大仮面の灌水儀礼であった。植民地化以前のダン社会には首長といえる個人が存在せず、男子結社ゴ(gɔ)の組織が一定数の村落を地縁単位に統合していた。ゴ結社はフランス植民地行政だけでなく、独立後の国家行政もふくめた外来権力をみな“白人”とみなし、そこから距離をおいてきた歴史をもつ。

その点たとえば植民地首長の息子で中央の役人ママドゥなど、結社にとっては二重の意味で“白人”のはずであった。しかしその彼が“白人でなく結社の息子として精霊から祝別されたいのです”とグアカトゥオの結社長に手紙をしたためてきた。地元の党要人をしたがえて来た当日のママドゥは、彼ら“白人”をすべてその場に残し、靴を脱いでズボンを膝までたくし上げ、精霊のいる聖所に一人向かう。灌水が無事に終わると、彼は“精霊の手からヒシヤクを離す”ために、ウシ1頭と35000 CFAを献じて、村を後にしたという。

大仮面の灌水儀礼さえ、実は“西の息子”である彼に課せられた政治的身ぶりの一つにすぎなかったのか、それとも一人の“結社の息子”が、自らの内で二つの“息子”を和解させようと願う気持ちのあらわれだったのか、それは当人以外にうかがい知れぬ、心の問題であろう。かえりみれば“西の息子”も“結社の息子”も、彼の家系に由来する“首長の息子”とは、いずれ無縁の場に成り立つ意匠であった。

(まじま・いちろう／東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)